

# NEWS LETTER



大阪女学院大学 大阪女学院短期大学

教 員 養 成 セ ン タ ー

● 巻頭エッセイ.....	1	・ 第2回勉強会.....	3
● 特集：「英語の教え方教室」.....	2	● 授業の玉手箱.....	4
・ 第1回勉強会.....	2	● 書籍紹介.....	4

## 巻頭エッセイ

東條 加寿子

### — 英語力の構造を考える —

今年4月に本学の4年制大学教職課程はスタートを切り、授業のデザイン力養成を主眼において様々な活動を開始しました。目下、本学教職課程の「基礎」構築中といったところです。何においても「基礎」は肝要です。しっかりとした礎があつてこそ、その上に一つ一つ積み上げ発展・展開していくことが可能になるからです。

さて、近年、大学の英語教育では基本的文法事項を取り扱うリメディアル科目を設置する大学の増加が見られます。英語の基本構造についての知識の欠如が、残念ながら、大学で本来実践すべき発展的・専門的英語教育を阻害している状況があるからです。

一方、2011年度から「コミュニケーション能力の素地を養う」べく小学校で英語必修化が開始されます。小学校から大学までの英語教育は系統だった一環したもので、段階的に確実に英語力を積み上げていくものでなければなりません。そのためには小・中・高・大の連携が不可欠で、とりわけ中学、高校の果たす役割が今後益々重要になってくるものと思われます。

ここで、英語力について、言語能力の構成要素を説明したDual Icebergの概念に沿って考えてみたいと思います。Dual Icebergは1980年にJames Cummins<sup>注1</sup>がバイリンガル教育研究の中で示したのが初めてですが、日本の英語教育論の中でも山田<sup>注2</sup>が独自の解釈を加えて使用しています。Cumminsは、言語能力にはBICS (Basic Interpersonal Communication Skills) とCALP (Cognitive/Academic Language Proficiency) があると、BICSは“manifestation of language in interpersonal communicative contexts” 即ち表層に現れる外部構造(日常

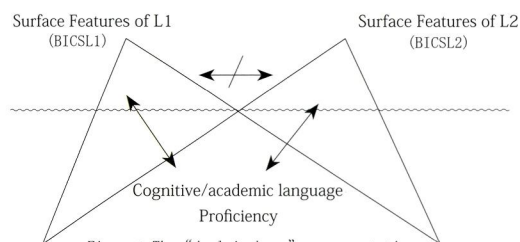


Figure: The “dual iceberg” representation of bilingual Proficiency (Cummins, 1980) (\*矢印は筆者による)

会話など)であり、一方CALPは“manipulation of language in decontextualized academic situations” 即ち認知や抽象的概念把握に関わる言語能力であるとしています。そして大変興味深いことに、第一言語(L1)と第二言語(L2)が関わる場合、二言語間でCALPは共有されるというのです。この“common underlying proficiency”を山田は「共通基底能力」と呼んでいます。

L1、L2をそれぞれ日本語、英語としてこの図を眺めてみると、英語力に関わるいくつかの側面が見えてきます。英語オーラルコミュニケーションは表層部BICS(L2)の部分にあたりますが、これは共通基底能力の上に築かれていますから、コミュニケーション能力を育むためには当然のことながら言語の構造に対するしっかりとした知識が必要であることがわかります。また、二言語間で基底能力が共有されていることは、日本語力が英語力に寄与するという説を裏付けています。

ここで考えてみたいのは、この構造から読みとれる英語の和訳に関する示唆です。本学の教職課程では中高の先生方と英語の教え方の勉強会を開催していますが、先日その中で生徒の和訳の問題に議論が及びました。例えば、“It made him empty.”という英文に対して生徒は「それは彼を空っぽにした」という和訳をしてしまう、「(心にぽっかりと穴があいて)空虚な気持ちになった」という状況が果たして理解できているかどうかこの訳からは確認するすべもない、ということでした。この例をDual Icebergに当てはめてみると、BICS(L2)(英語)をBICS(L1)(日本語)へ移し変えるいわゆる直訳では不十分であり、それは共通基底能力が稼働されていないことに起因していることがわかります。和訳においては、まず構文や単語の意味を理解した上で、英文はどのような状況を伝えているのかを自分の経験に照らし合わせたり一度概念を抽象化して考え、それから日本語ではどのような表現になるのかを考えてみるというプロセスを踏む必要があります。

小学校から大学まで効果的に英語力を積み上げていくためには言語の表層部にのみ捕らわれるのではなく、共通基底能力を稼働していくこと、即ち思考を呼び起こす言語活動を実践することが求められているのではないのでしょうか。

注1 Cummins, J. (1980). The Construct of Language Proficiency in Bilingual Education. In Current Issues in Bilingual Education. James Alatis ed. Georgetown Univ. Roundtable.

注2 山田雄一郎 (2006)『英語力とは何か』大修館書店